

【事例報告1】

学生利用をのばす図書館の試み

報告者：国際基督教大学図書館長代行 畠山 珠美

1 はじめに

(1) 国際基督教大学・国際基督教大学図書館の概要

国際基督教大学（ICU）は、1953年4月開学した学生数約3,000名、専任教員数150名、2008年度から学科を廃止し、1学部1学科（アーツ・サイエンス学科）制がスタートした。

ICU図書館は、約67万冊（洋：和＝48%：52%）、雑誌約8,000タイトル（うち和雑誌約270、冊子体：電子ジャーナル＝約1,200：約6,800）を所蔵しており、8時30分から22時30分まで開館（学期中の平日）し、専任職員13名、派遣職員3名のほか、パートタイマー、学生アルバイトで運営している。

開学以来「全ては利用者のために」をモットーとして、1960年から全面開架を導入するなど先進的な試みを行っている。また、貸出冊数に制限を設けないなど利用しやすい制度を導入している。

ICU図書館は以前から貸出冊数・入館者数の多い図書館であるが、近年2回ほど、利用が特に増加する変化が見られた時期がある。今回はその時期に何があったか検証することで、学生利用の向上に何が関係しているのかを考えてみたい。

(2) 利用状況の変化

ICU図書館の利用は、入館者数では2000年に30万人を超え、学生一人あたりの貸出冊数では、2000年に50冊、2003年に60冊を超えるという変化が生じている。この時期に何が起り、何が変わったのだろうか。

振り返ってみると、2000年9月には、新館ミルドレッド・トップ・オスマー図書館がオープンしており、2002年度から2003年度にかけては、図書館レクチャーのリニューアルを実施した。これらはインフォメーション・コモنز（IC）の導入、情報リテラシー教育のリニューアルという2つの変革の時期であり、これが利用の増加に関連していると考えている。

2 インフォメーション・コモنزの導入

(1) 導入の背景

1980年代後半、ICU図書館は書架スペースの狭隘化（横浜市の外部倉庫へ保管委託）、インターネット環境の必要性という課題を抱えていた。書架スペースの狭隘化は大学全体でも重大な問題と認識され、新しい図書館建築のための新図書館構想委員会が発足した。1993年にその報告書が学長に提出されたが、財政の問題等で実現には至らなかった。しかし、保存スペースの問題は早急に解決する必要があり、図書館内で再び検討が始まった。そして、予算規模を縮小した増築の可能性を検討し、1995年に図書館増築案を学長に提出した。同時期に多額の寄附があったことが幸いし、寄附金の一部を使って図書館の新館を建築することが決定した。

増築に当たって、内外の大学図書館の最新事情を調査したところ、当時米国でスタンダードになりつつあったインフォメーション・コモنز（IC）という学習環境が目にとまった。インフォメーション・コモنزこそICU図書館が求めているものと確信し、導入に踏み切ったのである。1998年12月新館建築工事に着工、2000年1月末竣工、2000年5～6月のテスト開館を経て、2000年9月、ミルドレッド・トップ・オスマー図書館（通称オスマー図書館 総面積 3,874 m²）が開館した。

ICU図書館のインフォメーション・commonsでは、①あらゆる情報にアクセスできる環境、②様々な学習形態に合ったスペースの提供、③サポート体制の充実をコンセプトとした。

(2) コンセプト① あらゆる情報にアクセスできる環境

インターネット等の電子情報に対応できるよう、オスマー図書館には大規模なコンピュータ環境を整備した。また、図書館本館と渡り廊下でつないだことにより、本館の館外持ち出し禁止資料もオスマー図書館では利用できるように、コンピュータールームがあるITセンターとの差別化を実現できた。

地下には自動化書庫を設置した。現在、蔵書のうち約25万冊の図書と、雑誌のバックナンバー、視聴覚資料を保管している。自動化書庫の最大のメリットは、「いつでも」「誰でも」「何冊でも」利用できることであり、全面開架というICU図書館の理念にできるだけ近づけることができた。また運用面では、出庫に関わる人件費がほとんど不要であり、また自動化書庫内には照明が必要ないため光熱費が大幅に削減できるというメリットもある。

新館1・2階のほぼ全てのフロア（各フロア1,100㎡）がスタディエリアとなっており、AVキヤレル16席のほか、個人席として122席（1階:Windows 70台 Macintosh 12台、2階:Windows 36台 Macintosh 4台）を整備している。

(3) コンセプト② 様々な学習形態に合ったスペース

快適な学習環境を整備することを主眼に、学習形態に合った家具・機器の設置に力を入れた。

個人学習スペースであるスタディエリアには、広い机と座り心地のよい椅子を用意し、PC教室（席が並列）の硬いイメージを払拭した自由なイメージのレイアウトを実現させた。余裕のあるスペース確保に留意したほか、外の景色との調和を考慮し、三方をガラス張りにした。

レクチャースペースであるマルチメディアールームには、座席50席（全席にノートPC）と、教卓用PC2台（Windows, Macintosh）、スクリーン（100インチ、2面）、プロジェクタ、ビデオ（VHS、8mm、β）、スライド、DVD・CD・LD等のデッキ、実物投影機を整備した。

グループ学習スペースとしてはグループ学習室を3室設置した。ディスカッションやプレゼンテーションの準備など、それぞれの用途に合わせた家具をそれぞれに設置するなど配慮している。各室には、モニタ、VHSビデオデッキ、DVDデッキ、PC、ホワイトボードを整備した。利用時間は8時30分～22時で予約制としているが、どの部屋も予約で一杯という状況が続いている

(4) コンセプト③ サポート体制の充実

新館がオープンした当初は、本館と同様に新館にもレファレンスカウンター（主にオンラインデータベースの指導を行う）を設置し、コンピュータの技術的サポートを行うデスクとしてヘルプデスクをITセンターから移設した。

しかし、実際に運用してみると、いくつか問題が発生した。最も深刻な問題が質問に来た学生をたらい回しにしてしまうということである。学生は窓口ごとの機能の違いを意識せず、一番近いところにいるスタッフに質問する。質問を受けた窓口で担当が異なる場合は別の窓口を案内するため、結果的にたらい回しとなり、次に質問しようという学生の意欲をそぐものとなっていた。また、職員減員等により、2つのレファレンスカウンターをカバーする要員が不足したこと、業務委託スタッフと協同でサポート業務を運営することの限界等から、改善が必要になったのである。

そしてこの全ての問題を解決する新しい体制として考えたのが、サポート窓口の一元化である。ヘルプデスクはITセンターへ戻し、ヘルプデスクのあった場所に本館と新館のレファレンスカウンターを統合した「レファレンスサービス・センター」を設置した。本館にはレファレンス窓口はなくなったが、簡単なものは貸出・返却等を行うドキュメント・サプライセンターで対応できるように、特に支障は生じていない。

レファレンスサービス・センターには、職員4名が常駐し、8時30分から18時まで、2名ずつシフトを組んで対応している。専任制であるため、職員のスキルがアップし、現在ではPC操作指導から事項調査まで、個別指導からグループ指導までほとんどの指導を行っている。

(5) 学生が図書館に求めていること

インターネットが普及した現在、自宅で簡単に情報にアクセスできるため、図書館に学習の場は必要ないのではないかと疑問を抱く人もいるだろう。また、学習の場は必要だが、図書館でなくてもよいという見方もある。しかし、実際、オスマー図書館には連日多くの学生が押し寄せている。学生は一人ではなく、誰かが勉強していて自分の学習意欲を掻き立ててくれる場所、そして「聞ける(質問できる)」人がそばにいる場所を求めているのである。また、インターネットで流通される情報が膨大化しているとは言え、まだまだ印刷物でしか入手できない情報は多く存在する。学生が求めている場を提供できるのは情報を蓄積している図書館しかないのである。

現在、ICU生の学習の拠点はオスマー図書館であると言っても過言ではない。インフォメーション・commonsの導入とレファレンスサービス・センターの設置によって、ICU図書館は大きく前進できた。

3 もっと利用をのばすには… 情報リテラシー教育の充実

学生はなぜ図書館に来ないのか。その原因には、学生が学習にはインターネットの情報で充分と思っている(=図書館資料の必要性を感じない)、感想文と学術論文の違いがわからない(=参考文献の必要性を理解していない)等があるが、とりわけ新入生が大学と高校の学習の仕方の違いを知らないことが大きい。だからこそ、利用を伸ばすには情報リテラシー教育が必要不可欠であり、特に新入生への最初の指導が重要である。

(1) ICUにおける情報リテラシー教育

ICUでは、以前から英語教育プログラム(English Language Program, ELP)を情報リテラシー教育の場と位置づけ、情報探索法指導、情報整理法指導、情報表現法指導を実施している。このうち、情報探索法指導を図書館員が担当し、残りの2つをELP教員が担当している。

「ELP」とは、4月入学生(毎年560~570名)の必修科目である。英語を学ぶのではなく、英語は単なるツールと考え、1年次のほとんどと2年次の一部を使って、大学生に必要な「読む」「書く」「聞く」「話す」の基礎能力を身につけることを目的としている。

そのカリキュラムは次の5コースに分かれている。

- ①Academic Reading and Writing Course(1年次) ②Reading and Content Analysis Course(1年次)
- ③Communicative Strategies(1年次) ④Sophomore English(2年次) ⑤Theme Writing(2年次)

(2) 図書館員によるレクチャーの概要

図書館ではELPの授業のうち、前述の①Academic Reading and Writing Course(1年次春・秋各1回)及び⑤Theme Writing(2年次)の3コマを使用して、従来から図書館レクチャーを実施している。

1年次春学期(4月中旬~5月上旬)では、図書館資料の基礎知識(資料の種類・媒体、配架方法等)やOPACの使い方を、1年次秋学期(9月中旬~10月上旬)には雑誌論文の探し方(オンラインデータベースの使い方)を指導している。2年次(各学期で開講)は1年次秋学期の応用編として主題に合った文献の探し方を指導する。

(3) レクチャーの見直し

2002年度、レクチャーの効果を上げるため、一番重要と考える1年次春学期のレクチャーの見直しを行った。見直すきっかけは、新入生に対するアンケートでELPの授業の中で図書館のレクチ

チャーを行うことについて疑問を投げかける意見がいくつか寄せられたことに発する。

1年生の春の時点では、自分の今後の学習に図書館資料がなぜ必要なのかということを学生は理解していない。図書館のレクチャーの必要性を学生に理解してもらうために、レクチャーの冒頭でレクチャーの目的を述べることから始めることにした。具体的には、「学術論文とは何か」という説明からスタートし、レポートやエッセイには必ず参考文献が必要であることを述べた。また、レクチャーは講義ではなく実習中心とし、学生が興味をもって取り組めるようにグループワークを採用した。また、学生がどれだけ理解したかを把握するために、事前事後テストの実施を決めた。

現在のプログラムは、授業時間70分で、レクチャーの主旨説明&事前テスト、グループワーク(1組3〜4名)20分、解説とまとめ25分、事後テストという配分で行っている。

グループワークでは、OPACを使って図書館資料を探し出すという課題を与えている。単にOPACで検索して請求記号をメモするだけでなく、図書館へ行き実際に資料を持って来させるという点が実習のポイントである。課題を与えることで、問題意識を持って館内を歩くことになり、資料が請求記号順に並んでいること、一般図書と辞書類は分けて置いてあること、新聞には縮刷版やマイクロフィルムもあることなどを学生は自然に理解することになる。

(4) 2007年度の実施状況

2007年度は、マルチメディアルームでゼミ単位のものも含め年間60数回のレクチャーを実施した。受講者数は、1年生春学期17回571名、1年生秋学期16回576名、2年生12回(春3回、秋5回、冬4回)594名である。

ICU図書館では、図書館員にとって情報リテラシーに携わることが最も重要と考え、13人の職員全員が携わる体制を取っている。1クラス2名で担当し、主担当は課題作成・司会進行、副担当は補佐・評価を行い、全員が1回は主担当者となるようにしている。これにより、通常の業務でほとんど学生と接点のないテクニカル業務の担当者も、レクチャーによって学生と接する機会を持つことができ、日常業務のモチベーション向上にも結び付いている。

(5) 効果的なレクチャーとは

以前、自由参加型ガイダンスを実施していたが、時間帯や広報を工夫しても思うように学生が集まらないという経験をした。効果的なレクチャーを行うためには授業・ゼミとの連携が重要であり、授業との連携には教員の協力が不可欠である。また、内容にも配慮が必要である。レクチャーの時間は限られているため、レクチャーがどれだけ印象に残るかが重要である。つまり、レクチャーは図書館資料を使うきっかけを作ることであって、多くを盛り込もうとすると失敗する。レクチャーでカバーできなかった部分はレファレンスサービス・センターで指導することができる。つまり、レクチャーとレファレンス業務の両方を駆使して、情報リテラシー教育を推し進めることが重要である。

(6) 今後の課題

レファレンス業務とレクチャーが図書館員にできる情報リテラシー教育である。

今後は、3・4年生を対象にしたレクチャーの強化を図っていきたいと考えている。また、論文作成のサポートなど、今まで以上に図書館が大学の教育活動に関わっていけるよう、図書館員のスキルアップに力を入れたいと考える。

また、図書館に来る人だけではなく、非来館者向けのサービスの充実も重要である。電子ジャーナル、データベース等のデジタル資料の拡充に加え、e-レファレンス(カウンターとWebで受けた質問の大部分をWebで公開)の周知と強化が今後の課題である。

※「Q&A」の参照URL <http://www-lib.icu.ac.jp/QandA/index.htm>